

=====
年次の先生方からのメッセージです。 今月は5組の川崎はるな先生と志村かおり先生です。
=====

『 香りと記憶 』

最近気温がぐっと下がり、雪が降りそうな気配ですね。私の席は給湯器付近のため、毎日多くの先生方がお湯を使いに来ます。コーヒー、お茶、スープ etc…様々な香りがして賑やかです。さて今回は「香りと記憶」についてお話したいと思います。(かおり先生と繰り広げているポケとツッコミの日々は割愛♡) 甲府西高校では、秋になると金木犀の香りがどこからともなく漂ってきますよね。金木犀の香りに触れると、私は一瞬なぜか切ない気持ちになります。そして両親が共働きだったため一人になる時間の多かった小学校低学年の自分を思い出します。なぜ香りから記憶が呼び覚まされるのかというと、人間の五感の中でも、香りを感じる嗅覚だけが記憶をつかさどる海馬にほぼ直接的に信号を送ることができるからです。厳密には、嗅覚からインプットされた情報が、喜怒哀楽をつかさどる大脳辺縁系という脳の部位へ信号を送り、そこにある海馬や扁桃核が反応を起こすという仕組みがあるようです。香りに触れると頭の中にある思い出の保管場所から、その時に感じた喜怒哀楽や好き嫌いの感情などととも記憶が呼び起こされます。このように香りと脳が結びつく仕組みをブルースト効果と呼ぶそうです。



私にとって「ファンヒーターの匂い」は受験期の自分を思い出すものです。正直、大学受験をもう一度経験したいとは思いません。ですが、経験して本当によかったとは思っています。苦しいけれど受験に向き合ったからこそ、大学生生活は非常に充実していました。「何も咲かない寒い日は、下へ下へと根を伸ばせ。やがて大きな花が咲く。」この言葉は、情けなくて、悔しくて、逃げ出したかった時期に出会ったものです。頑張っているはずなただけで、上手いかわなくて、勉強も家族も友達も全てのことが嫌になる瞬間がありました。比較しなければいいのですが、結果がでている周りを見て落ち込みました。だからこそ、高校生の頃の自分には、この言葉が本当に沁みました。今も大切にしています。辛いときほど、この言葉を思い出して根を張れるようにと精一杯踏ん張っています。皆さんの根は確実に伸びています。1つ1つ吸収して、寒い冬を乗り越えてください。そして素敵な春を迎えましょう！



5組担任 川崎 はるな

『 If winter comes, can spring be far behind? 』

(“Ode to the West Wind” Percy Bysshe Shelley の言葉より) 』

よく耳にする話ですが、いつも身近にあるものは、あることが当たり前のようになり、ありがたみがわからなくなる。しかし、なくなって初めてそのありがたみがわかる。皆さんもそのような経験はありませんか。なくなる前にその大切さに気付ける方法はないのでしょうか。

寒くなりました。皆さんがそれぞれの目標に向かって邁進している様子が見られ、皆さんの大願成就を願えるものには何にでも願っている今日この頃です。それと同時にこの時期になると私が高校3年生だった時のことを思い出します。祖母のために買ったはずの孫の手のついた肩たたきは常に私の部屋にあり、肩をたたきながら勉強していたこととか、兄が宮島で買ってきてくれた「合格」と書かれたしゃもじを勉強机の横に飾り、第一志望に合格したらこのしゃもじでご飯をよそって食べようと考えていたこととか、試験の前日になると毎回不思議と隣のおじさんが家に来て「おねーちゃん、降りておいでー、アイス持ってきたからー。」と言われていつもおじさんと話しながらアイスを食べていたこととか。高校3年生の時に頑張っていた自分の姿を、今考えてもとてもいとおしく、目標に向けて一生懸命に頑張った経験は一生の宝物です。その中でも一番の宝物は、3月の末になって大学に入学の手続きのために自転車で写真屋さんに写真を撮りに行った時の風の記憶です。富士吉田の冬は本当に寒く、顔を洗った時に濡れた前髪は学校につく時には凍っているくらいでした。でもその時の風は、いつもの刺すような冷たいものではなく、ふわっと暖かく感じられました。その時に春が来たことを実感しました。



上の二つの話はやや違う話のようですが、いずれにせよ人は比較することによってさまざまな価値を見出しているのかもしれませんが。最初の話では、ある状態となくなった状態、次の話では冬の寒さと春の暖かさ、もしくは不安感と安心感です。思いもかけないものが実は大切だったりすることもあります。そして、「冬来たりなば、春遠からじ」。今は喜びの前の大切な準備段階です。今もうひと踏ん張り、そのあとに喜びが来ます。自分を信じて、冬を生きましょう。

春は来ます。もうすぐです。

5組副担任 志村 かおり